

| | | | | | | |
|-------------|--|---|---|--|---|-------|
| 岩崎純一歌集 | | 『新純星余情和歌集』>1996年の部 | | | | |
| 歌集名読み | | しんじゆんせいよせいわかしふ | | | | |
| 作者 | | 岩崎純一 | | | | |
| 通釈・語釈 | | 園井長光、岩崎純一(自釈) | | | | |
| 作者サイト | | http://iwasakijunichi.net/ | | | | |
| 和歌ページトップ | | http://iwasakijunichi.net/waka/ | | | | |
| 詠進年月日 | 題 | 1996年の歌会・歌合(全て自歌会・自歌合) | 通釈 | 語釈 | 他歌人欄 | |
| 主催: 岩崎純一 | 歌数:1首 歌人数:1名 自歌数:1首 | 『我が人生で初めて諳んじた和歌への謹呈歌』 (わがじんせいではじめてそらんじたわかへのきんていか) | | | 評 | 派生歌など |
| 1996 | 私の人生で初めて覚えた和歌「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」(阿倍仲麻呂『古今』)への懐古と敬意から、これを本歌として掛詞や唯美的な和歌の練習をした際の歌。 なお、この本歌に初めて出会い、諳んじたのは、幼稚園または小学一・二年生の頃であった。 自撰 | | | | | |
| 1996/11/2 | 故郷 | 一人思ふ花ふるさとの春日 山夢を三笠に出でし月影 | 桜の花が降り散っていた、故郷の春日の三笠山から月が昇っていた光景を、一人思い出す。故郷に帰るのは、夢のまた夢であることだ。 | ◇本歌取 「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」(阿倍仲麻呂『古今』) ◇掛詞 「(花)降る×故(郷)」「(夢)見×三(笠)」 | ◆まだ技巧面にぎこちなさが見られると思うが、体言止めのおこない方には、のちに私の主要な歌風となる余情和歌の体の前兆が見えると自分で感じた。(自注) | |